

25号から、当団体スタッフによるベトナム留学記を掲載しています。今回はNaさんの手記です。

### 「ベトナムの母」

留学から帰国して8年経っても、私には心から敬愛する人がベトナムに二人いる。一人は一年間ずっとベトナム語を教えてくれた先生。もう一人は養母。今回は養母の話をしたと思う。

サイゴンの大学に通い始めて1ヶ月も経っていない頃だった。ちょうど雨季に入ったときで、夕方の授業に向かう私はスクールに打たれてびしょびしょになりながら、駐輪場に自転車を止め、学校のカフェに腰を下ろして雨ガッパを片付けたり、濡れた顔を拭いたりしていた。

「お嬢さん！ちょっとお嬢さん！」

ふと顔を上げると雨ガッパを着たおばちゃんがカフェの片隅で腰掛けながら、私に微笑みかけていた。駐輪場で自転車を預かる仕事をしているおばちゃんだった。おばちゃんは、夜は自転車預かりの仕事をしているが、昼間は学校の医務室で働いている下級医師で、娘も同じ学校の日本語学科で日本語を勉強しているから娘と友だちになってほしい、週末にうちに遊びにおいでと言った。日本人ということでやたら親しげに話しかけてくる人、日本語を教えてくれと家に押しかけてくる学生など、積極的に近づいてくるベトナム人に嫌気と警戒心を持ち始めていたころだったので、私は適当に話を合わせた。「土曜日の朝、校門の前で待ってなさい。うちの娘がバイクで迎えに行くから」と言われたのに、私はその場所に現れなかった。「ベトナム人も時間を守らないし、約束しても現れないことがあるじゃないか。まして暗がりでもよく顔も分からない人の家に行ってどうなるか分かったもんじゃない」と思ったからだ。

翌週、学校に行くと、医務室から怒鳴り声が聞こえた。「お前！何でうちに来なかった！約束を破ったな！」この人は本当に怒っている。約束を破ったらベトナム人も怒るんだ。必死に謝りながらそんなことを思っていた。

そのときから私はおばちゃんとまっすぐ向き合うことにした。同時にこのときから、私とおばちゃんの家ぐるみの交流が始まった。私は授業のない日以外ほぼ毎日、医務室でおばちゃんとおしゃべりをするようになった。おしゃべりだけでなく、お昼を食べたり、昼寝をしたりするようになった。そんな中で、いろんなことをおばちゃんから教わった。ベトナム人の親子関係、学校でのマナー、風習、先生たちの噂話、時には罵り言葉まで(!)教えてくれた。特に、両親の大切さ、敬う心をおばちゃんに巡り会って教えてもらったと思っている。

いつしか私はおばちゃんを養母として慕い、おばちゃんは私を養子と呼んでくれるようになった。養母は実の母と同様に、私が誤った選択をしたとき、叱り飛ばした。叱られてもすぐには納得できなかったこともあるが、今振り返ると、養母がストレートに叱ってくれたことは正しかったし、有難かったと思う。



養母の家でテトのお祝い

ベトナム人の情は深くて厚い。しかし、残念ながら複雑な問題が絡むとベトナム人の深くて厚い人情が信じられなくなることもあるのも現実だ。私自身、ベトナム人との関係で不信感に陥りそうになったことが何回かある。そんなことがあってもベトナム人に愛情を持っていただけるのは、養母のような無償でまっすぐな愛情を与えてくれる人がいるからだと思う。養母は、私にとってベトナム人の性格の愛すべきところを凝縮したような人だ。養母に感じている強い結びつきと信頼感がある限り、私はこれからもベトナム語を使い、ベトナム人に愛情を持っていけると思っている。